

近代ヨーロッパにおけるナシヨナリズムとキリスト教

鶴見 太郎

ナシヨナリズムとキリスト教の関係を捉えるのは意外と難しい。一般的には、キリスト教が世界史での役割が論じられるとき、むしろ帝国主義の推進役としての役割、あるいは逆に、帝国主義やその他国内的抑圧からの解放運動の結節点として論じられることが多い。一方、ナシヨナリズムという特殊主義については、他の、より特殊主義的な宗教、例えばユダヤ教やヒンドゥー教と比べて、結びつきは明確でない。

少なくとも建前としては普遍主義的なキリスト教は、ナシヨナリズムとは本質的にはあまり関係がないのだろうか。つまり、せいぜい、例えば、ナシヨナリストと水の関係ぐらいのものしかないのか。水はナシヨナリストに命を

吹き込むから、ナシヨナリストにとって不可欠な要素だという言い方はできる。しかし、社会主義者も自由主義者もノンポリも、みな同様に水を必要とするため、例えば、水とナシヨナリズムは関係があるとか、水がナシヨナリズムを促進したと言うのは、水に対してフェアではない。

ただ、誰に対しても真に中立的な水と比べると、キリスト教は、少なくとも無神論を掲げがちで独自の社会観を持つている社会主義とは相性が悪く、個人主義がベースの自由主義ともあまり結びつきはよくない。実際、一九世紀のヨーロッパでは自由主義の浸透に対して、また二〇世紀のヨーロッパでは共産主義の脅威に対して、保守的なナシヨナリストと共闘するという局面がキリスト教世界では

しばしば見られた。とすると、水と比べると、キリスト教はナシヨナリズムに対してある程度の親和性を持っているとはいえよう。それでも、それ以上どのぐらい親和性があるのかはやはりはっきりしない。

結論からいうと、関係はないが関係があるように見えてしまう、ということなのではないだろうか。

ここで、メコネサンス (meconnaissance) という概念を参照したい。これはもともとフランスの精神分析家ラカン周辺が用いた概念で、直訳すると「誤解」という意味になるが、ここでは特に、あるシンボルに対して、立場によって読み込む意味にズレがあるという状態を指す。同床異夢という日本語に近いかもしれない。

まず当事者の、つまり歴史上の人々のメコネサンスについては、一番わかりやすい例は村田報告が提示している。トルコ政府、ギリシア政府、国際機関はそれぞれ、民族という意味での住民交換を想定していたが、実際に用いられた指標は宗教だった。住民からは、宗教によって住む場所が制限されたと受け止められていたのではないか。ただ、統治者レベルでは民族、住民レベルでは宗教という認識のズレがあっても、統治者は特にその点を厳密にすりあわせることはせず、それで住民が動くならそれでいいと思っていたのだろう。

井出論文も、実はこうしたズレについて詳細に提示している。エトノス、具体的には教区社会とネーションのズレという形で提示されていることがそれに相当する。各教区が、マジヤール人がスロヴァキア語を軽視したことで、結果として反マジヤールで一致したわけだが、各教区の上層部も住民も、ともにネーションやナシヨナリズムというつもりはなく、あくまでも自分の教区を守ることだけを考えていた。世俗的なスロヴァキアナシヨナリストからすると、少し違う意味でスロヴァキアというカテゴリーが注目されていることになるが、マジヤール人に対抗するうえでは、そのズレをわざわざ調整する必要もなく、そのまま利用してしまえばよいということになり、敵としてのマジヤール人、あるいはそこから逆照射される一体的なスロヴァキア人というシンボルの意味は違った形で捉えられながら、結果としてスロヴァキア・ナシヨナリズムというものが発展したかのような経路をたどっていくことになったのである。

興味深いのは、井出論文はさらに研究者のメコネサンスの疑いも突きつけていることである。これまで、東欧はナシヨナリズムの本場として研究者のあいだで記憶されてきた。ハプスブルク帝国やロシア帝国の一部を崩壊させた力、また冷戦崩壊期における様々な動きの大きさ、深刻さは、ひとえにナシヨナリズムの問題とされてきた。しかし、そ

それは、結果としてナシヨナリズムに見えたというだけで、実際には少し違う意味で動いていた人々、具体的には、依然としてキリスト教界隈の影響力が強いなかで動いていた人々が、ズレをはらみながらも結果的にはネーションの境界と重なる形で動いていたということだった可能性がかなりあるのではないか。研究者は主要な世俗知識人や政治家、そして結果だけを見てナシヨナリズムだと錯覚してしまっているのかもしれない。

大澤論文についても当事者と研究者両方のレベルでのメコネサンスを見ることができる。人種隔離政策に対する対抗としてアフリカ人のナシヨナリズムが生まれたことへの言及があった。キリスト教がその際に彼らの信念の源泉になっていたということは、冒頭で指摘した、支配に対する抵抗運動にキリスト教が絡むことがあるといったことに重なることだろう。そこで当事者たちのなかで、まさにアフリカ・ナシヨナリズムという形でこうした動きをまとめていこうとした人々がいた一方で、隔離政策ゆえの抑圧に抵抗する、つまり人種差別に抵抗するいうところに焦点があった人々も多かったのではないか。そうした人からすると、アフリカ・ナシヨナリズムは、カテゴリーとして不都合ではないにせよ、意味合いは少しずれていたはずで、同床異夢だったのではないだろうか。

歴史学、特に二〇世紀以降のそれに関しては、過度に世俗的な概念が用いられる傾向がある。そのことによって何が見落とされるのか、また、宗教関連の概念を見ることで何が明らかになるのか。三報告は、こうした点を問いつけている。

（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻准教授）